

年間テーマ: 神の家のよろこび

第6回 新しい歌を主にうたえ

「神の家のよろこび」をテーマに行ってきた2024年度のセミナーも最終回を迎えます。今回のテーマは「新しい歌を主に歌え」です。

現在、カトリック教会では25年に一度の「聖年」を迎えています。この聖年のために準備されたロゴには、英語で“Jubilee”と書かれています。「聖年」と訳されているこの語には「歓喜の叫びを上げる」という意味が含まれています。わたしたちにとっての「歓喜の叫び」は、典礼では歌として表現されています。また、「よく歌う人は倍祈る」と古くからいわれてきたように、わたしたちの歌は祈りそのものです。「喜びの年」を迎えたいま、主なる神に向かって賛美の歌をささげることについて、一緒に考えてみましょう。

1. コロナ禍と典礼の歌

・コロナ禍の影響

集まってはいけない

たとえ集まることができても歌わない

オンライン配信のミサを見ながら歌う（声に出して／心の中で）

・集まることが許されても……

あえて歌わない

オルガンを聞きながら心の中で歌う／歌詞を黙読する

代表者（先唱者や聖歌隊の数名）が歌い、会衆は沈黙

マスクを着けたまま、隣の人に聞こえないぐらいの小声で歌う

・教会活動が再開しても

以前のように歌えない

あえて歌わない

歌わなくても典礼は成り立っていた → 歌わなくてもよいのでは？

2. とともに歌うこと

気持ちが高揚したときの共通の行為としての「歌」

共同生活を始めた人類のきずなを確かめるための「歌」

ともに歌うこと…共鳴・共感 → 共同体を生み、はぐくみ、保つ

3. ユダヤ教から受け継いだ歌

出エジプト記15・1-21：海の歌

士師記5章：デボラの歌

サムエル記上2・1-11：ハンナの歌

サムエル記下22章：ダビデの感謝の歌 など

詩編47・6-7；66・2；68・33；81・2-4；96・1-2；98・1、4-6 など

詩編146～150：ハレルヤ詩編

ルカ 1・47-55：マリアの歌、同 1・68-79：ザカリアの歌、同 2・29-32：シメオンの歌
マタイ 26・30、マルコ 14・26：最後の晩餐の後のイエスと弟子たちによる賛美の歌

使徒言行録 16・25 獄中でのパウロとシラスの歌
エフェソ 5・19、コロサイ 3・16：詩編と賛歌と霊的な歌
ローマ 11・33-36：神の偉大さをたたえる歌
フィリピ 2・6-11：キリスト賛歌
黙示録 4・11；5・9-10、12、13；11・15-18 など

「(キリスト者たちは) 決まった日の夜明け前に集まり、彼らの間で互いに、キリストに対して、神に
対するように賛歌を歌う。」(小プリニウス『書簡』10・96)

キリスト者の歌：人間を愛する神に対する、神を愛する人間からの応答

「新しい歌を主に向かって歌うように諭されます。新しい人は新しい歌を知ります。歌は楽しさから生
じます。そして、もっと注意深く考えると、歌は愛から生じるとも言えます。新しいいのちを愛する
ことのできる人こそ、新しい歌を歌うこともできます。」(聖アウグスティヌス「説教 34」『毎日の読書 第
3巻』42-43頁)

歌うことによって生まれる「一体性」

神との一体性

他の人々 (=共同体) の一体性

↓

ともに歌うことによる信仰の成長・強化

歌に関する聖アウグスティヌスの葛藤

「私は、信仰をとりもどしはじめのころ、教会の歌を聞いて流した涙を想起し、いまでもそれが、きよ
らかな声とよくととのった調子でうたわれるのを聞くと、歌そのものよりむしろうたわれている内容
に感動させられることを考え、このしきたりの大きな効用をあらためて認識するのです。このように
して私は、それがひきこむ快樂への危険と、にもかかわらずそれが有している救済的効果の経験との
あいだを動揺しています。……

それにしても、うたわれている内容よりも歌そのものによって心動かされるようなことがあるとし
たら、私は罰をうけるに値する罪を犯しているのだと告白します。そのような場合は、うたわれるの
を聞かないほうがよかったです。」(『告白』第10巻第33章50、山田晶訳376-377頁)

4. 典礼における歌の位置づけ

①第二バチカン公会議『典礼憲章』(1963年)

112 普遍教会の音楽の伝統は、諸芸術の他の優れた表現の中でも、はかりしれない価値をもつ宝庫を
なしている。それは、とくにことばと結びついた聖歌が、荘厳な典礼の必要ないし不可欠の部分とな
っているからである。……

……したがって、教会音楽は、祈りをより味わい深く表現したり心の一致を促進したりすることによ
って、また、さらに荘厳さを加えて聖なる祭儀を豊かにすることによって、典礼行為と固く結びつ
けば結びつくほど、いっそう聖なるものとなる。教会は、ふさわしい特質を備えたものであれば、真
の芸術のあらゆる形態を認め、それを神の礼拝の中に採り入れるのである。……

113 神聖な務めが聖なる奉仕者によって執り行われ、会衆が行動的に参加して、聖歌によって荘厳に行われるとき、典礼行為はいっそう高貴な形態を帯びる。……

②「ローマ・ミサ典礼書の総則」(1970年、1975年、2002年)

39 主の到来を待ち望みつつ一つに集まるキリスト信者は、詩編、賛歌、霊的な歌をともに歌うよう使徒パウロによって勧められている(コロサイ3・16参照)。歌は、心の喜びのしるしであるからである(使徒言行録2・46参照)。いみじくも聖アウグスティヌスは、「歌うことは愛している人のもの」と言った。また、古くからのことわざにも、「よく歌う人は倍祈る」とある。

40 したがって、国民性やそれぞれの典礼集会の能力に留意したうえで、ミサの祭儀においては歌うことも大切にしなければならない。本来歌うようになっている式文であっても、たとえば週日のミサでは、必ずしもいつも全部を歌う必要はないが、主日と守るべき祝日に執り行われる祭儀において、奉仕者と会衆の歌がまったくなくならないように留意しなければならない。

しかし、実際に歌う部分を選ぶ場合には、重要性の大きいものの中からまず選ぶべきである。とりわけ、司祭または助祭、あるいは朗読奉仕者(朗読者)が歌うべきもので、会衆が答えて歌うもの、もしくは司祭と会衆が同時に歌うべきものから始めなければならない。

5. 歌による会衆の参加～ミサの答唱詩編とアレルヤ唱(詠唱)

①答唱詩編

「ローマ・ミサ典礼書の総則」

61 第一朗読の後に答唱詩編が続く。これは、ことばの典礼に欠かすことのできない部分であり、典礼の面からも司牧の面からも重要な意義をもっている。それは、答唱詩編が神のことばの黙想を促すからである。

答唱詩編は個々の朗読に答えるべきであり、通常、朗読聖書から採られなければならない。

答唱詩編は歌われることが望ましい。少なくとも会衆の答唱に関してはそうである。したがって、詩編唱者もしくは詩編の歌唱者は、朗読台あるいは他のふさわしい場所で詩編の先唱句を唱え、会衆一同は座ってそれを聴く。さらに、詩編が連続して、すなわち答唱なしに唱えられるのでないかぎり、会衆は通常、答唱によって参加する。

本日(四旬節第一主日 C年)のミサの第一朗読と答唱詩編

申命記 26・4-10 選ばれた民の信仰告白

詩編 91・2+4ab、11+12b+10、14+15 (『典礼聖歌』129①②③)

②福音朗読前の応唱(＝アレルヤ唱・詠唱)

「ローマ・ミサ典礼書の総則」

62 福音の直前に置かれた朗読の後には、典礼季節が要求するところに従って、典礼注記によって定められたアレルヤ唱あるいは他の歌が歌われる。このような応唱は、それ自体独立した儀式もしくはは行為となっており、これによって、信者の集会は福音朗読において彼らに語りかける主を迎えてあいさつし、自らの信仰を歌によって表明する。聖歌隊あるいは先唱者が先導して一同が起立して歌い、必要なら繰り返す。唱句は聖歌隊あるいは先唱者によって歌われるが、日本では、聖歌隊がない場合や先唱者がいない場合は一同で歌うこともできる。

本日(四旬節第一主日 C年)のミサの詠唱と福音朗読

マタイ 4・4b 「人はパンによるだけではなく、神のことばによって生きている。」

ルカ 4・1-13 イエスは荒野の中を“霊”によって引き回され、誘惑を受ける

6. 典礼における沈黙

「ローマ・ミサ典礼書の総則」

45 聖なる沈黙も、祭儀の一部として、守るべきときに守らなければならない。沈黙の性格はそれぞれの祭儀のどの部分で行われるかによる。回心の祈りのときと祈願への招きの後には、各人は自己に心に向ける。朗読または説教の後には、聞いたことを短く黙想する。拝領後には、心の中で神を賛美して祈る。

祭儀そのもの前にも、聖なる行為が敬虔にかつ正しく行われるためにすべてが整えられるよう、教会堂、祭具室（香部屋）、準備室とそれに隣接する場所では沈黙が正しく守られなければならない。

沈黙の中からわき起こる歌、歌の後に訪れる沈黙

典礼の神秘性：音楽の美しさと沈黙の静けさの中で味わう

式文・行為・歌・沈黙によって生まれる典礼のリズム → 典礼における「間（ま）」

歌うことと聞くこと

「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストのことばを聞くことによって始まるのです。」（ローマ 10・17）

神（キリスト）のことば → 聞く → 回心 → 信仰 → ことばによる賛美・感謝

7. 絶えざる神への賛美

「口で歌っていることと生活が矛盾しないようにしなさい。声で歌い、心で歌い、口で歌い、生活で歌いなさい。……神を賛美したいのですか。それならば、あなたがた自身の存在があなたがたの言っていることになるようにしなさい。正しい生き方をすれば、あなたがた自身が神への賛美なのです。」（聖アウグスティヌス「説教 34」『毎日の読書 第3巻』44頁）

「自分の全体をあげて神を賛美しなさい。つまり、口と声だけでなく、心、生活、行動でも神を賛美しなさい。わたしたちは今、聖堂の中に集まって神を賛美していますが、おのおの自分の家に帰るとき、神を賛美することをやめるかのようです。正しく生きることを続けるならば、人は神を常に賛美しているのです。」（聖アウグスティヌス「詩編 148 注解」『毎日の読書 第3巻』86頁）